

アマンバイ移住地

Amambay



アマンバイってどんな場所？

通りを超えるブラジル

アスンシオンからはバスで8時間。ブラジルとの国境に位置するこのアマンバイ県ペドロ・ファン・カバジェロ市に、1956年5月から日本人の入植が開始しました。コーヒー栽培に端を発したアマンバイの日系社会は、ブラジルへのアクセスを活かした発展を遂げています。ブラジル人とは日常レベルで交流が盛んです。例えば、約7割の日系子弟はブラジルで初等教育を受け、同様に多くのブラジル人がペドロ・ファン・カバジェロ市内の大学（主に医学系）に通っています。子どもたちは、この地に住むだけで自然とスペイン語・ポルトガル語が話せるようになるといいます。



ブラジル経由の商品も充実する日系の「メルカード スガ」



様々な種類の緑茶も並ぶ。



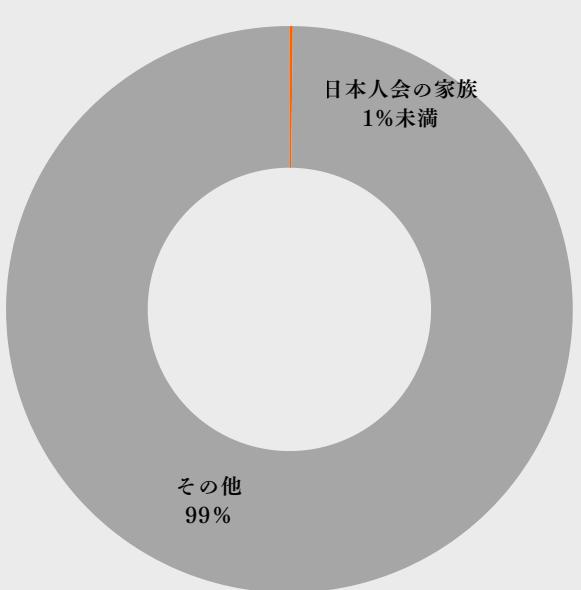
おにぎりや海苔巻きなども。

メルカード スガ (Mercado Suga) では、日本の食卓に並ぶような食材や、日本製の菓子、あると助かる日本の雑貨などが販売されており、多くの方に重宝されています。商品の中にはポルトガル語で表記されたパッケージのものも多いです。また価格もブラジルの通貨（レアル）・パラグアイの通貨（グアラニー）・USドルで表示されていますが、国境周辺のこの辺りでは珍しいことではありません。

人口
アマンバイ県
P.J カバジェロ市
人口
約13万人

日本人会の
家族約250人

● 日本人会家族 ● その他



※2025年10月時点

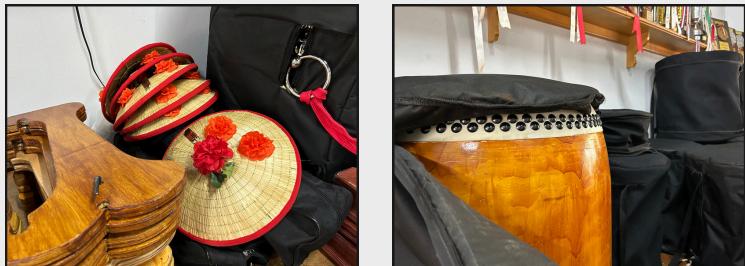
アマンバイ日本文化協会（日本人会）



社団法人 アマンバイ日本文化協会
所在地：Tte. Herrero y Curupayty No. 390, P. J.
Caballero, Amambay, Paraguay
電話・FAX：(+595 336)272 529
メール：amambayjp@yahoo.co.jp

ブラジルとの国境付近には、1956年に設立されたアマンバイ日本文化協会（以下「日本人会」）が存在します。日本人会は、教育・文化・体育・福祉の各分野において幅広い活動を展開しており、傘下の日本語学校（後述）によって、七夕や子どもの日などの伝統的な行事も実施されています。中でも、毎年2～3回開催される「日本人祭り」は、日本人会の参加団体並びに個人による日本料理の屋台に多くの地域住民が訪れ、日本の食文化に触っています。更に、日本文化の継承と普及に関して、成人式や敬老会などの行事を実施している他、オフィスに保管されている花笠や大太鼓などの品々を活用し、日系社会を超えた地域社会全体に魅力を発信する取り組みもしています。

また、アマンバイの日系社会は、ブラジルの日系社会との交流も盛んです。国境を越えたブラジル国内に居住する日系人も、アマンバイの日本人会の活動に参加しています。また、ブラジルの拠点都市であるドーラードスはアマンバイから約120キロの距離にあり（アスンシオンは約430キロ）、ドーラードスの日系コミュニティとはゲートボールの大会などで交流があります。



婦人部

むつみ会

青年部

日本人会は、婦人部、むつみ会、青年部で構成されています。婦人部は、協会主催のイベントの運営を行い、日本人会の中核を担っています。むつみ会（老人会）の主催するゲートボールやカラオケ大会は大人気で、日系コミュニティの元気の源です。青年部は近年に組織されたもので、現在は15名の若者が所属し婦人部や日本学校の行事のサポートをしています。さらに、青年部が主催する「健康の日」は、医学を学ぶ青年部員の知識を活かした健康促進を目指す取り組みで、2025年に開催した時は日系・非日系併せて約80名が参加し大盛況でした。



アマンバイ日本文化協会公民館

協会の建物に隣接する公民館には、体育館ほどの大きさのホールが備えられており、様々な活動に使用されています。夜になると強豪の卓球チームなどが練習しています。このような活動は、日本人会の収入源の一つとなるとともに、交流の機会や社会貢献にもなっています。



休日は、「ショッピングチナ」でお買い物

アマンバイの中でも最大のショッピングモールである、「ショッピングチナ（Shopping China）」。広大な店内の中には食品、日用品、スポーツ用品、衣料品まで何でも揃います。フードコートもあり、休日は一日ここで過ごせそうです。

アマンバイ日本語学校



アマンバイ日本語学校では、幼稚園から中学校までの課程が設置されており、5名の教師によって日系・非日系の生徒合わせて50名ほどが国語や日本語を学んでいます。近年は非日系の方々の日本語学校への関心も高まっており、それは日本語学校で子どもたちに礼儀なども身につけさせたいと思う保護者が多いことによるものだといいます。また、遊具付きの校庭や屋根のある運動場を備え、休み時間にはドロケイが人気の遊びだそうです。



日本語学校での学校生活は、まさに日本でのそれを彷彿とさせます。生徒はみんなで校歌を歌い、運動会や「お話弁論大会」に向けて練習に励み、家では漢字練習に勤します。日本語能力試験の会場にもなっており、N2レベルを受験する生徒もいるそうです。



校舎の2階は職員室になっています。職員室には1976年の開校以来使用してきた教材が棚を埋め尽くしています。先生方は、年間の授業計画や、各授業の「ねらい」を丁寧に整理し、効果的なカリキュラム作りを目指しています。授業では、日本で使われている教材、かつてJICAのボランティアで派遣された隊員が作った教材などを使います。加えて、オリジナルの漢字練習帳も作成するなど、教材開発も行っています。家庭で日本語を使わない生徒も増える中、実態に合わせた体制整備に努めています。

アマンバイ移住地の歴史と今

アマンバイの日系社会は、1956年5月、コーヒー農園における契約雇用農の入植によってはじまりました。この契約雇用農はかつてのブラジルの奴隸制度に代わるものとして導入された背景もあり、厳しい労働環境でした。その農園が経営不振で倒産したのを機にアマンバイにおけるコーヒー農園の自営が試みられ、同時期にアマンバイ農業組合が発足します。コーヒーは当時、「金の成る木」と信じられており、他の移住地で暮らしていた日系人も惹きつけました。しかしながら、コーヒー農園は1975年の霜害に遭うことでの全滅し、その後は大豆栽培、養鶏、養豚、牧牛等による多角化経営へと変わっていきました。アマンバイの農協は、これまで物資を安く仕入れ作物を高く売るために必要とされてきたものの、各農家の情報へのアクセスが向上し、また農家数も減少したことにより役割が縮小してきました。現在はブラジルとパラグアイでの価格差を利用した商業で成功する日系人が多く、新たな時代が到来しています。



ペドロ・ファン・カバジェロ市の至近にそびえるセロ (Cerro) は、アスンシオンからの長旅の終わりを告げている



アマンバイ移住地についてさらに詳しく知りたい方は要チェック！！

<https://x.gd/aW2Yd>